MESSAGE FROM HARUTOSHI FUKUI

『真夏のオリオン』の真夏は、2009年の真夏なのだ。

映画『ローレライ』の公開から四年。
このわずか四年の間に、時代は恐ろしい勢いで変わりました。『ローレライ』においては、未来、すなわち我々が生きる現代に希望を託し、進んで捨石になった人々の姿を描きました。そのような困難と犠牲を経て現在の日本がある、と確認することで、バブル崩壊以後の空白から抜け出せない現代日本人に、生きる意義を再発見してもらえないものかと目論んだのです。

過去を確認することで現代のありがたさを知る。『ローレライ』のテーマはそのように要約できます。それは、いろいろ問題があるにせよ、とりあえずみんなが生きていける世界においてのみ通用する論旨でした。
しかるに、2009年。海の向こうで証券会社のひとつが潰れただけで、「みんなが生きていける世界」はあっさり終わってしまいました。
他にも新型インフルエンザやら環境危機やら、国どころか人類社会を脅かす問題がごろごろしている。我々は不幸にして、「地球の危機」「人類の危機」という言葉をリアルに受け止めねばならない、人類史最初の人間たちになってしまったのです。このような時代に、過去を確認して現代をありがたがっていられるものか？答は考えるまでもありません。現代こそが困難な時代になったのです。六十億の人間は生きていけないと実証された惑星で、六十億の人間が生きていかねばならないのです。

だとすれば、我々が欲するフィクションはひとつ。困難を生き抜く勇気、死地を乗り越えて生還する人々の物語です。
『ローレライ』でも使った第二次世界大戦下の日本という舞台設定には、この要件を満たす素材もまた含まれていました。それを気づかせてくれたのが池上司氏の原作です。
死へ向かう道具を、生きるために使う。原作が提示したクライマックスのアイデアこそ、あらゆる普遍に繋がる人間の知恵でしょう。となれば、あとはこの実直な戦記小説をいかにして現代的エンターテインメントに仕立て直すか。それが自分に課せられた仕事になりました。
すなわち、我々は『真夏のオリオン』という作品において、過去を描いたつもりはありません。あの時代を必死で生き抜いた人々は、これから困難と闘っていかねばならない我々の似姿であり、そこで生じる葛藤と不和と信頼の物語は、そのままわたしたちのものなのです。過去を確認することで現代のありがたさを知る、幸せな時代は終わりました。これからは、過去の困難を生き抜いた人々から学び、明日に活かしていかなければなりません。

『真夏のオリオン』の真夏は、2009年の真夏なのです。

監修・脚色　福井晴敏

STORY

「オリオンよ、愛する人を導け…」

現代――教員をめざす倉本いずみ（北川景子）のもとに、アメリカから一通の手紙が届いた。
手紙には、差出人の祖父の遺品という楽譜が添えられていた。その楽譜は、いずみの祖母・有沢志津子が書いたものであった。日本人の手で書かれた譜面が、なぜ、時を経てアメリカから届いたのだろう？　いずみはたった一枚の楽譜を頼りに、64年の時を紐解くことになる…

1945（昭和20）年8月。第二次世界大戦末期、沖縄南東海域――日本海軍は、米海軍の燃料補給路を叩くため最後の潜水艦隊を配備していた。日本の戦局は日に日に悪化を辿り、米軍の本土上陸が近い今、この作戦は最後の防衛ラインともいえた。
イ-77の艦長・倉本孝行（玉木宏）は、共に同作戦に参加するイ-81の艦長・有沢義彦（堂珍嘉邦）とは海軍兵学校からの親友であり、その妹・志津子（北川景子・二役）とも互いに想いを寄せ合う仲であった。出航前、志津子は倉本に自作の楽譜を手渡した。イタリア語で『真夏のオリオン』と題された譜面には、倉本へのメッセージが書き添えられていた。
『――オリオンよ、愛する人を導け』
真夏の夜空に輝くオリオンは吉兆といわれ、志津子はその星に愛する人の帰還を願ったのだ。
倉本たちが迎え撃つのは、米海軍駆逐艦パーシバル。艦長のマイク・スチュワートは、米海軍きっての歴戦の勇士であり、日本軍の人間魚雷「回天」の攻撃で弟を失くしたことで、さらなる闘志を漲らせていた。スチュワート艦長は、大胆かつ周到な知略で前衛の有沢が指揮するイ-81の防衛ラインを突破し、倉本たちの艦へと迫った。
命を賭した戦いの中でも、生きる希望を決して失わないイ-77潜水艦艦長、倉本孝行。水面下の敵を徹底的に追い詰める駆逐艦パーシバル艦長、マイク・スチュワート。互いに知力と体力の限りをつくした最後の戦いの熱い火蓋が切って落とされた。パーシバル艦との激戦の果てに、イ-77は甚大な損傷を受け、艦内酸素の残量もわずか1時間となった。起死回生の手段は、艦内に搭載された人間魚雷「回天」の発射のみと思われたその時、倉本艦長の下した決断とは……。

6.13 ROADSHOW

フジTV前・アクアシティお台場
シネマメディアージュ
☎ 03 (5531) 7878
通常料金での全席指定・定員入替制
http://www.cinema-mediage.com

劇場内での映画の撮影・録音は犯罪です。
映画盗撮の情報提供は
www.eigakan.org
0120-550098

日本よ、浮上せよ!

日本人の手によって書かれた一枚の楽譜『真夏のオリオン』が、
64年のときを経て今、あの夏のすべてを語り始めた…
1945(昭和20)年8月14日 第二次世界大戦・終戦前夜ー太平洋
巨大戦力を誇るアメリカ駆逐艦に日本最後の希望「イ-77潜水艦」が挑む
海上の知将vs海中の天才
知力の限りを尽くした究極の攻防戦が今、始まる!
日本人の心を揺さぶるテーマ&スケール、ここに誕生。

『真夏のオリオン』よ、浮上せよ。

1957年公開のアメリカ映画に、『眼下の敵』という作品がある。
第二次世界大戦中のドイツ潜水艦とアメリカ駆逐艦の一対一の攻防を描いたものだが、いわゆる戦争アクションとは一線を画し、両艦二人の艦長が繰り広げる人間対人間の信念と誇りのぶつかり合いこそが、ドラマの主軸だった。そしてすべての決着がついたとき、互いの間には、艦長としての誇りとシーマンシップにより、深い友情が生まれていた。
この名作こそが、『真夏のオリオン』の出発点であった。
我々は、脚本開発の足掛かりとして、第二次世界大戦での海戦を生き抜いた、日米の退役軍人とその家族に綿密な取材を続け、映画に勝るとも劣らぬエピソードを掬い上げていった。そうした取材の結果、生み出されたのが、本作の主人公、イ-77潜水艦艦長「倉本孝行」像であり、対する米駆逐艦艦長「マイク・スチュワート」像である。

「亡国のイージス」「ローレライ」の福井晴敏が、4年の沈黙を破って放つエンタテインメント超大作が遂に完成。

同じ頃、製作陣は一編の小説と出会う――池上司の著書『雷撃深度一九・五』。1945年(昭和20年)7月、日本海軍潜水艦イ-58潜が米巡洋艦インディアナポリスを撃沈させた歴史的な戦いをモデルにしたこの小説には、クライマックスで潜水艦艦長(小説では、その役を担った人物)が発案し実行する、空前絶後の胸のすくような「フェイク」ともいうべき作戦が描かれていた。これを果てしなく続く戦闘の終着点と定め、そこに至る過程を新たに創造しストーリーの軸とすることで、脚本の骨格はほぼ決まった。
しかし、どうしてもクリアし、作品に反映させなければならないことがあった。
――この映画が単に過去のある時間を描くものであってはならない。
――今、この時代に向けてこそ伝えるべき「何か」を持たねばならない。
そんな思いから、すでに『ローレライ』という潜水艦を舞台とした映画を手掛けた福井晴敏の参加を切望した。壮大なフィクションの中に時代の真実を追い求めた『ローレライ』から、今度は、時代の真実の中に大いなるフィクションを投げかけることで、この物語を現代に投影するという最も重要な命題が彼に託された。そして福井晴敏が生み出した、「60年を経て届いた一枚の楽譜」というひとつの大きなシークエンスは、まさに過去と現在を繋ぎ、作品に命を吹き込み、『真夏のオリオン』というタイトルに結実したのである。
監督は、『地下鉄に乗って』『山桜』『深呼吸の必要』など、優れた人間ドラマの演出に定評のある篠原哲雄。緊迫感溢れるドラマを引き立てるサウンドトラック&主題歌を、『レッドクリフ』シリーズなど世界で活躍するコンポーザー・岩代太郎が手がける。満を持してのデビューとなるいつかの「願い星〜I wish upon a star〜」は、観るものの心を昇華させることとなるだろう。今日、考え得る最高の布陣が揃い、『真夏のオリオン』は遂にスクリーンという大海に出航していく。

誰もが信頼をよせる理想のリーダー像、イ-77潜水艦・倉本艦長を玉木 宏が熱演

キャストにも最高に理想的な顔ぶれが集結。
主人公イ-77潜水艦・艦長、倉本には人気実力とも若手ナンバーワン俳優の玉木 宏。徹底した役作りをもとに理想のリーダー像を見事に演じきる。現代で「真夏のオリオン」の楽譜を手にする倉本いずみ、有沢の妹・志津子の二役をいま最も注目を集める女優・北川景子が演じ、そして倉本の無二の親友で、僚艦イ-81潜艦長・有沢を、トップ・アーティストとして活躍するCHEMISTRYの堂珍嘉邦が俳優としてスクリーンに初登場。
また、倉本を支える個性溢れる幹部潜乗員には、平岡祐太、吉田栄作、吹越 満、鈴木 拓(ドランクドラゴン)、益岡 徹という顔ぶれが揃った。さらに、黄川田将也、太賀、松尾光次、古泰むつとし、奥村知史、戸谷公人、三浦 悠ら、注目の若手俳優たちが加わって、既存の戦争映画のイメージを一新する鮮烈でエネルギッシュな演技を披露する。

【日本映画の枠を超えたスケールでのリアル&迫力の映像世界を実現】

撮影にあたっては、潜水艦という限定された空間ながらも様々な角度から撮影を可能にするため、東宝スタジオ内に「イ-77潜水艦」の巨大セットを建造。「発令所」「機関室」「魚雷発射管室」などは計器やバルブのひとつまで徹底したセットを作りこみ、イ-77潜水艦・艦内を再現した。また、イ-77潜と対峙する駆逐艦パーシバルは、本物にしか出しえないリアルさを求めるこだわりから、第二次世界大戦中にアメリカ海軍の大西洋護衛艦として数々の海戦に参戦し、終戦後はニューヨーク州アルバニー市にて保存されている駆逐艦で撮影、さらに駆逐艦が海原をダイナミックに走るシーンは、メキシコ海軍の協力を得て第二次世界大戦後アメリカ海軍から譲り受け、今なお、現役として機動している駆逐艦を航行させるなど、日本映画初となる破格の協力態勢を得て本物にしか生み出すことが出来ない迫力あるリアルな映像を実現した。